

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

年収の高位と低位 (年収ランキングから)

4月1日午前8時過ぎ、東京駅から日本橋方面に向かって歩いていくと、この日から社会人になった(らしい)若者をたくさん見かけました。堅苦しそうにスーツで身を包みいくぶん緊張した表情から「新人」と直ぐ分かります。これから入社に臨むのでしょうか。そんな彼らを見て、自分が入社した頃を思い出そうとしました。昭和48年4月、もう37年も前のことです。あの頃は、……。しかし、僅かなことを除いて殆ど記憶に残っていない事実、改めて歳月の長さや重さを感じました。

私と同年者は、今年入社する新人と入れ替わるようにこの3月退職期を迎えました。昨年4月から今年3月にかけて満60歳を迎えたのです。退職はサラリーマンにとって一大イベントに相違ありません。再雇用でそのまま働く人も少なくないと思いますが、一区切りをつける方も多い筈です。他人事ながら、これからどんな人生を生きていくのか関心が湧きます。

そんな折り、地元市役所を退職した同級生の退職金が3千万円を超えていると聞こえてきました。それを耳にしたとき、若干複雑な気持ちになりました。私が22年の銀行勤務で得た退職金(2百万円)とあまりに差があったからです。正直、羨ましく思いました。

「昔、薄給」だった地公体職員が「今、高給」になったのはそれなりの理由があると思います。高度成長期の給与支給モデルを、バブルが崩壊しても、経済がグローバル化しても、経済環境がすっかり変わっても、維持継続してきたからです。歳月を積み重ねれば自動的に給与、退職金が跳ね上がっていくシステムは、いつの間にか地公体を地域最大の人気職種に変えました。私の見るところ、地公体職員の実質年収は地域の平均的中小企業社員の2倍に達しています。

この実態に対する反発は、既に大分前から始まっていますが、将来の税収を先食いした財政が今後も維持できるとは思えません。人件費は最後の聖域になると思いますが、多くの地公体が緩やかに「夕張」を目指すことは間違いないのではないのでしょうか。新人諸君の期待を裏切り、不安が実現してしまうのではないかと危惧します。

さて、そうして振り返ってみると、民間企業の人件費は既に大きな格差が発生しています。メディネットグローバルという会社(社長は工学博士西野嘉之氏)が企業価値検索ユーレット(ullet.com)というHPで様々な企業財務データを発信していますが、そこで「平均年収ランキング」なるものも公開しています。私もアクセスしてみたのですが、上場会社3,728社の社員の平均年収が全体及び業種別に高位、低位順に見ることができます。それを見ていると、同じ上場企業であっても、同じ業種であっても、上位と下位では大きな差があることが分かり、思わず溜息が出てくる程です。

他人の懐を覗き見てあれこれ云うのは気が引けますが、それを見ていると色々なことが見えてきます。何故、年収が高いのか。それは企業努力なのか、業界環境なのか、業歴なのか。グローバル展開企業と内需型企業の違いなのか。規制の強弱、規制の有無に関係があるのか、等々。

見ればそれぞれに思うところがあると思いますが、下記にその一端を転記してみたいと思います。業種別に高位企業、低位企業の平均年収を書いてみます。もし関心があったら同社のHPを除いてみて下さい。

業種	順位	社名	年収	平均年齢
建設	1	鹿島建設	934	44
	239	桧家住宅	419	39
鉄鋼	5	住友金属	728	42
	56	ニッタン	463	43
電機機器	4	ソニー	980	40
	296	大日光	360	32
輸送機器	2	トヨタ自	810	38
	104	エイケン	341	38
卸売	1	三井物産	1,442	41
	361	山大	306	35
小売	8	ユニクロ	767	36
	368	マルコ	258	32
銀行	17	千葉銀行	751	40
	94	豊和銀行	436	38
不動産	1	三菱地所	1,139	40
	125	やすらぎ	329	43
サービス	1	電通	1,277	39
	364	トスネット	235	39

(金額単位：万円)